

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第 53 回

歴史に問われる<わたしたち>

Jordan Sand (ジョージタウン大学歴史学部教授)

---

7月20日、「グローバル・ジャスティス」第53回目の講演では、ジョルダン・サンド教授(ジョージタウン大学歴史学部)をお招きして行われた。2015年5月5日、米国の日本研究者187名により、慰安婦問題などを中心とした第二次世界大戦に関する公正な歴史認識を訴えた「日本の歴史家を支持する声明」が公表されたが、サンド教授は同声明の呼びかけ人のお一人である。

今年2015年は、史上最大の被害を出した戦争から70年が経ち、大きな節目である。10年後にはこの経験を直接語れる人は皆無になるだろう。さまざまなメディアでも歴史認識をめぐる問題に注目が集まるが、この声明の背景にも同様の問題意識がある。私は専門的に戦争に関して研究してきた研究者ではないが、教員として、アメリカの大学で日本史を教えてきた立場からお話する。

この声明文は、2014年10月の日本歴史学研究会による声明に賛同する形で、アメリカを中心とした欧米187人の日本研究者によって出された。なかでも従軍慰安婦に重点を置いているのが特徴的である。5月5日に私たちが声明を出した後も、ヨーロッパなど、ほかにも多くの日本研究者が声明への支持を表し、賛同者は続々と増えた。日本国内外を問わず、ほぼ全ての日本史研究者が声明の内容に賛同している。国の政治問題に外国の研究者が介入するのは異例だが、「上から」目線ではなく、できるだけ建設的に受け入れられるよう努めたつもりである。私のように、日米を往復する生活を送っていると、両者のメディアに大きなギャップがあることを強く感じる。今日話したいことは以下の3点である。(1)なぜ歴史認識のギャップが生じたのか(2)正しい歴史認識とは何か(3)このようなギャップはどうしたら縮められるのか。

現在日本は、国外の世界とは全く異なる歴史認識を持っている。日本が正しく、世界がまちがっている可能性もあるが、そのような歴史家の意見はほんの一部である。多くの署名は日本を愛する人々によるもので、また、戦争犯罪を過小

評価する態度は許せないという研究者たちの認識および危惧である。日本は、メディアや教科書を叩くよりも、広範な資料研究と証言収集を支持するべきである。このような認識のギャップは、過去 20 年で大きく台頭したナショナリズムに起因しているが、その基本的性質は、感情的である点だ。自分と国家の関係にうまく折り合いがつけられず、国家が攻撃されるとまるで自分自身が攻撃されているかのように感じてしまう。日本の政治指導者や教育者は、右派も左派も、個人と国家の関係を明らかにするために十分に努めてこなかったのではないかと思う。また、「戦後に生きる我々がどうして謝らなくちゃいけないのか」という質問をよく受けるが、当然個人として謝る必要はなく、しかし、国民の責任は、過去に日本が犯したことを理解し、過ちを二度と起こさないよう、平和的な民主主体の形成を守っていくことである。

問題にギャップを生じさせている 2 つ目の理由は、これがジェンダーと性に関する問題であるからでもある。慰安婦問題は、侵略戦争と全ての人権問題を象徴するものになったからこそ今回の声明で焦点を当てた。「侵略戦争」の問題であれば、国家間の問題として、つまり男性世界の中で処理できることであるが、「性奴隷制」になると、男性が公の前で恥をかかされ、また依然として男性たちは、犯罪の深刻さを理解しづらい。

(2)の、正しい歴史認識に関してだが、「正しい」歴史認識というのは、歴史学の方法論上複雑な問題である。歴史は単に事実を集めればいいわけではなく、事実を集めても史実はそこにあるわけではない。慰安婦問題は数に関していくつもの説があり、事実を断定できないものは教えるべきではないという意見も聞かれるが、数を精査する一方で、過去のごく断片的な痕跡を集め、なるべく広く共有できる解釈を求めることも歴史学である。今回の声明は、非専門家にも理解できるよう概念用語を避けたが、現在の本質的な問題は、多くのアジア人女性が被害を受け、日本軍によって作られた制度の中で被害を受け、その責任が日本政府にあることである。日本軍によって被害を受けたという女性の証言は、8 カ国にもものぼっており、それを嘘だというのは歴史家として正しくないと思っている。

(3)そして、このようなギャップはどうしたら縮まるのであろうか。歴史認識の問題は、教科書における記述がしばしば重視され、確かに重要なことだが、しか

し歴史教育のすべては教科書ではない。現在、私が教えるジョージタウン大学の教室には多くの東アジアからの留学生や移民がおり、様々な角度から議論している。国が定める「正しい」歴史ではなく、多角的な歴史解釈を行う授業や、より国際的な見地をもつ教育を通して、どのように過去に対する認識を共有できるかが重要である。このような方法を通して、人類のための、偏っていない歴史認識の仕方を身につけつつあると実感している。

確かに、自国による海外での暴力行為を認めることはむずかしい。しかし、国家間レベルで、日本と韓国が悲劇的過去を共有できないということはないと思う。アメリカでは、最近韓国系アメリカ人によって慰安婦像が立ったことがニュースになった。記念像というものは歴史学的には曖昧な表現ではあるが、細かな歴史上の解釈の相違を争点にせず、しかしなお、ある歴史的解釈を共有する点で十分な意味をもつ。同じものが東京に立てば、過去の過ちを繰り返さないという日本政府の誓いとなるだろう。

(文責 細島汐華)